

はじめに

東洋大学 国際哲学研究センター長
河本 英夫

人工知能の能力向上には、眼を見張るものがある。5G通信は、片側100車線の高速道路のようなものである。情報の容量と速度は、桁違いに向上した。だがその後の6G、7Gの構想はすでに進んでいる。AIは、無類の記憶力と人間の視知覚を超えた判断能力、倦むことをしらない試行錯誤で、人間の能力の一部を大幅に超え出ている。

周囲のより優れたものに自分自身で適合してきたというのが、人間の機械文明の習わしであるのだから、おそらく今回も人間は身の丈を超えるものに適応していくに違いない。

人間の能力の発現を考えた場合、身の丈を超えたものに適合していくさいに、人間自身はどのような選択肢を獲得したかが、議論の一つの焦点である。身の丈を超えるものに適合していくさいに、人間自身の選択肢が減るのであれば、機械への従属、自分で作り出したものによって逆に制約されるという「自己疎外」というような言葉で語られた事態が生じることもあろう。

だが情報技術ではほとんどこうした事態の可能性はない。というのも人間の個々の関与の場面は、むしろ増えているからである。朝の電車でも、ゲームアプリに一生懸命の人たち、音楽を聴いている者たちは多い。多くの変数が活用できる形で情報技術は提供されている。

問題は人間の能力そのものをさらに開発し、さらに展開可能なようにプロセスを進むことのできる開発技術「変数」はどのようなものなのかという問いである。5G通信の世界は、まさに驚異的で戸惑うほどのものだが、瞬く間に慣れてしまう。こうした技術革新は、プロセス的な技術革新であり、内部の細分化と速度の向上によって作り出されている。

これに対して人間の能力そのものの別様な可能性を拓き、別様な選択肢を提示してくれるような革新を、「産出的イノベーション」と呼んでおく。現行のAIとは別様な技術革新はあるに違いない。

またこうした情報技術の革新とともにもたらされる「現実性」そのものの変化にも配慮が必要となる。経験はおそらく気が付いたときには変貌している。また公共性の内実にも変化が及んでいると思われる。そこに「倫理性」「法」「協約」がからんでくる。各国の軍

や政府機関には、諜報機関として情報専門の部署がある。水面下での各国の情報を巡る戦いは、すでに法外のものになっている。当面、多くの課題を浮かび上がらせるように事態を分析すべき局面が続いていくと予想される。